

アンソロジーの誘惑

奇形学の紋章 俳句編



テラトロジー

——アンソロジーとは偏愛といふ奇形学である。

藪野直史

「やぶちゃん注：私の好みで基本、正字としたが、PDFで横転する字は正字化した。横転現象は必ずしも総ての同字に起こるわけではないので、正字になっているものもある。悪しからず。」

アンソロジーの誘惑／俳句篇

正岡子規

蝸や夕日の里は見えながら

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

夏嵐机上の白紙飛び盡す

炎天や蟻這ひ上る人の足

迎火の消えて人來るけはひかな

漱石に別る

行く我にとどまる汝に秋二つ

啼きながら蟻にひかるゝ秋の蟬

我に落ちて寂しき桐の一葉かな

いくたびも雪の深さを尋ねけり

鐘の音の輪をなして来る夜長かな

五月雨や上野山も見あきたり

鶏頭の十四五本もありぬべし

絶筆三句

絲瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗絲瓜の水も間に合はず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

高濱虚子

遠山に日の当たりたる枯野かな

桐一葉日当たりながら落ちにけり

金龜子擲つ闇の深さかな

ワガハイノカイミヨウモナキスゝキカナ

春風や鬨志抱きて丘立つ

蛇逃げて我を見し眼の草に残る

能すみし面の衰へ暮の秋

囀の高まる時の静かさよ

白牡丹といふといへども紅ほのか

流れゆく大根の葉の早さかな

凍蝶の己が魂追うて飛ぶ

大いなるものが過ぎ行く野分かな

初蝶を夢の如くに見失ふ

手毬唄かなしきことをうつくしく

日のくれと子供が言ひて秋の暮

人生は陳腐なるかな走馬燈

去年今年貫く棒の如きもの

河東碧梧桐

赤い椿白い椿と落ちにけり

木の間低く出た月の戸を引いてしまふ

明日雪マタになるや西空ソラの星ヒトツを見かけて出る

この道の富士になりゆく芒かな

泉鏡花

春淺し梅様まゐる雪おんな

おぼろ夜や去年の稻づか遠近に

をちこち

おぼろ夜や片輪車のきしる音

浮世繪の絹地ぬけくる朧月

灌佛や桐咲く空に母夫人

ぶにん

蟹の目の岩間に窪む極暑かな

雲の峰石伐る斧の光かな

黒猫のさし覗きけり青簾

午の螢ゆびわの珠にすき通る

ひる

わが戀は人とり沼の花菖蒲あやめ

百合白く雨の裏山暮れにけり

桑の實のうれける枝をやまかどし

稻妻に道きく女はだしかな

實柘榴のうすらゆくばかり月夜かな

十六夜にたづねし人は水神に

打ちみだれ片乳白き砧かな

木犀の香に染しむ雨の烏かな

山姫やすゝきの中の京人形

鵜の額かゝる雲の峰の堂

結綿に蓑きて白し雪女郎

松明^{まつ}投げて獸追ひやる枯野かな

姥巫女が梟抱いて通りけり

荻原井泉水

月にちつと顔照られ月見る

カ一ぱいに泣く兒と鶏との朝

わらやゆきふりつもる

村上鬼城

春の夜やを圍み居る盲者達

己が影を慕うて這へる地蟲かな

川底に蝌蚪の大國ありにけり

冬蜂の死にどころなく歩きけり

凍蝶こりつみの翅つばさをさめて死にけり

何もかも聞き知つてゐる海鼠かな

蟪蛄の頭まはして居直りぬ

種田山頭火

てふてふひらひらいらかをこえた

分けいつでも分けいつでも青い山

放哉居士の作に和して

鴉啼いてわたしも一人

この旅、果もない旅のつくつくほうし

笠にとんぼをとまらせてあるく

まつすぐな道でさみしい

うしろすがたのしぐれてゆくか

鐵鉢の中へも霰

砂丘にうづくまりけふも佐渡は見えない

尾崎放哉

ふららこや人去つて鶴歩みよる

暮るる日や落葉の上に塔の影

北窓の暮れ果つるまで見送らむ

灯をともし來る女の瞳

龜を放ちやる晝深き水

わが胸からとつた黄色い水がフラスコで鳴る

つくづく淋しい我が影よ動かして見る

一日物云はず蝶の影さす

なぎさふりかへる我が足跡も無く

沈黙の池に龜一つ浮き上る

山の夕陽の墓地の空海へかたぶく

柘榴が口あけたたはけた戀だ

佛飯ほの白く蚊がなき寄るばかり

たつた一人になりきつて大空

氷屋がひよいと出て白波

砂山赤い旗たてて海へ見せる

蛇が殺されて居る炎天をまたいで通る

わかれを云ひて幌おろす白きゆびさき

タベひよいと出た一本足の雀よ

蟻を殺す殺すつぎから出てくる

人をそしる心をすて豆の皮むく

何か求むる心海へ放つ

うそをついたような晝の月が出てゐる

淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る

雀のあたたかさ握るはなしてやる

漬物桶に鹽ふれと母は産んだか

底が抜けた柄杓で水を吞もうとした

浪音淋しく三味やめさせて居る

とかげの美しい色がある廃庭

うつろの心に眼が二つあいてゐる

血がにじむ手で泳ぎ出た草原

眼の前魚がとんで見せる島の夕陽に来て居る

さはある髪をすき居る月夜

すばらしい乳房だ蚊が居る

足のうら洗へば白くなる

とんぼが淋しい机にとまりに来てくれた

なん本もマツチの棒を消し海風に話す

山に登れば淋しい村がみんな見える

壁の新聞の女はいつも泣いて居る

山は海の夕陽をうけてかくすところ無し

花火があがる空の方が町だよ

あけがたとろりとした時の夢であつたよ

蜥蜴の切れた尾がはねてゐる太陽

道を教へてくれる煙管から煙が出てゐる

蛙釣る兒を見て居るお女郎だ

障子あけて置く海も暮れきる

爪切つたゆびが十本ある

入れものが無い両手で受ける

咳をしても一人

汽車が走る山火事

戀心四十にして穗芒

松かさそつくり火になつた

昔は海であつたと櫓をくべる

山火事の北國の大空

月夜の葦が折れとる

あすは元日が来る仏とわたくし

雨の舟岸に寄り來る

渚白い足出し

霜とけ鳥光る

やせたからだを窓に置き船の汽笛

春の山のうしろから烟が出だした

飯田蛇笏

芋の露連山影を正しうす

つぶらなる汝が眼吻はなん露の秋

山國の虚空日わたる冬至かな

死病えて爪うつくしき火桶かな

蚊のこゑや夜ふかくのぞく掛け鏡

芥川龍之介の長逝を悼みて

たましひのたとへば秋の螢かな

をりとりてはらりとおもきすすきかな

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

雪山を匍ひまはりゐる餅かな

萩原朔太郎

冬日くれぬ思ひおこせや牡蠣の塚

冬日暮れぬ思ひ起せや岩に牡蠣

枯菊や日日にさめゆく憤り

虹立つや人馬にぎはふ空の上

秋さびし皿みな割れて納屋の隅

芥川我鬼

青空に一すぢあつし蜘蛛の糸

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

怪しさや夕まぐれ来る菊人形

木がらしや東京の日のありどころ

短日たんじつやかすかに光る皿の蝦蛄

世の中は箱に入れたり傀儡師

青蛙おのれもペンキぬりたてか

花芒すずき払ふは海の鱗雲

木がらしや目刺しにのこる海のいろ

濡れそむる蔓一すじや鴉瓜

木の枝の瓦にさはる暑さかな

更けまさる火^ひかげやこよひ雛の顔

行秋やくらやみとなる庭の内

かげろふや影ばかりなる佛たち

水涕や鼻の先だけ暮れ残る

山口誓子

流水や宗谷の門波荒れやまず

蟪蛄の銕ゆるめず蜂を食む

蜂舐ねぶる舌やすめずに蟪蛄こほむしり

かりかりと蟪蛄蜂の貌かほを食む

「やぶちゃん注：「貌」は「形」であるが、PDFでは横転してしまっている。「貌」とした。」

夏草に汽罐車の車輪来て止まる

ピストルがプールの硬き面にひびき

夏の河赤き鐵鎖のはし浸る

つきぬけて天上の紺曼珠沙華

殻のうちししむら動く蝸牛

海に出て木枯歸るところなし

寒き夜のオリオンに杖挿し入れむ

悲しくて冬の水母に杖をやる

竹下しづ女

短夜や乳ぜり泣く兒を須可捨焉乎
すてつちまおか

梅白しかつしかつしと誰か咳く

ペンが生む字句が悲しと蛾が挑む

杉田久女

相寄りて葛の雨きく傘ふれし

わが歩む落葉の音のあるばかり

足袋つぐやノラともならず教師妻

櫛やがて吹雪の渦に吸われけり

われにつきるしサタン離れぬ曼珠沙華

蟬涼し汝の殻をぬぎしより

ちなみぬふ陶淵明の菊枕

舂して山ほととぎすほしいまゝ

羅うらの乙女は笑まし腋を剃る

竜胆も鯨も掴むわが双手

蝶追うて春山深く迷ひけり

中村汀女

曼珠沙華抱くほどとれど母戀し

とどまればあたりにもゆる蜻蛉かな

おいて來し子ほどに遠き蟬のあり

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

暮歩く到りつく辺のある如く

雪しづか愁なしとはいへざるも

鳩沈みわれも何かを失ひし

橋本多佳子

雪はげし抱かれて息のつまりしこと

山蛾食ひ切子ふたたび明もどす

火蛾捨身よこ流れ流れて大切子

百足蟲の頭づくだきし鋏まだ手にす

鷺撃たる羽毛の散華遅れ降る

蜥蜴食ひ猫ねんごろに身を舐める

蜂の巣をもやす殺生亦たのし

深裂けの柘榴一粒だにこぼれず

垂直に崖下る猫戀果し

靱殻の深きところできりんご觸れ

氷塊の深部の傷が日を反す^{かへ}

西東三鬼

小脳を冷やし小さき魚をみる

水枕ガバリと寒い海がある

白馬を少女瀆れて下りにけむ

梅を噛む少年の耳透きとほる

手の螢にほひ少年ねむる晝

算術の少年しのび泣けり夏

緑蔭に三人の老婆わらへりき

篠原鳳作の死「内二句」

友はけさ死せり野犬の草を齧む

葡萄あまししづかに友の死をいかる

少年兵抱キ去ラレ機銃機ニ残ル

寒燈の一つ一つよ國敗れ

中年や獨語おどろく冬の坂

おそるべき君等の乳房夏來る

中年や遠くみのれる夜の桃

穀象の一匹だにもふりむかず

男・女良夜の水をとび越えし

枯蓮のうごく時きてみなうごく

露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す

哭く女窓の寒潮縞をなし

倒れたる案山子の顔の上に天

廣島や卵食ふ時口開く

蓮池にて骨のごときを掴み出す

蟹死にて仰向く海の底の墓

炎天に犬捕り低く唄ひ出す

秋の暮大魚の骨を海が引く

海に足浸るした三日月に首吊らば

春を病み松の根つ子も見あきたり

中村草田男

冬の水一枝の影も欺かず

木葉髪文藝永く欺きぬ

冬すでに路標にまがふ墓一基

降る雪や明治は遠くなりけり

燭の燈を煙草火としつチエホフ忌

万緑の中や吾子の齒生え初むる

焼跡に遺る三和土や手毬つく

空は太初の青さ妻より林檎うく

眞直往けと白痴が指しぬ秋の道

光ある中^{うち}妻子と歩め薄氷期

芝不器男

空の光の湯の面にありぬ二月風呂

紅葉山の忽然生みし童女かな

夜長さを衝きあたり消えし婢をんなかな

うまや路ぢや松のはろかに狂ひ風

北風やおおぞらながら暮れはてゝ

向日葵の葢を見るとき海消えし

寒鴉し己へが影の上へにおりたちぬ

まぼろしの國うつつ映ろへり石鹼玉

泳ぎ女の葛隠るまで羞ぢらひぬ

加藤秋邨

罽雲人に告ぐべきことならず

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃

墓誰かものいへ聲かぎり

雉子の眸のかうかうとして賣られけり

鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる

死ににゆく猫に真青の薄原

火を出でてきりきり白き秋の壺

人間をやめるとすれば冬の鴟

篠原鳳作

ふるぼけしセロ一丁の僕の冬

海の旅 三句

満天の星に旅ゆくマストあり

しんしんと肺碧きまで海の旅

幾日いくかはも青うなばらの圓心に

月光のおもたからずや長き髪

莠持つ指の冬陽をたのしめり

ルンペンとすだまと群れて犬裂ける

ルンペンの唇くちの微光ぞ闇に動く

起重機にも食ませる人小さき

昇降機吸われゆきたる坑あなにほふ

草焼くるにほひみだして鶏つるむ

大空の一角にして白き部屋よ

月光のすだくにひよまるき女のはだ

月光のこの一點にわれ小さき存在

晴れし日も四角な部屋に。ピエロ我

氷雨よりさみしき音の血がかよふ

喜多青子に憶ふ

詩に瘦せて量かさもなかりし白き骸から

罪業の血のうつくしさ炭火に垂らす

自画像の青きいびつの夜ぞ更けぬ

太陽に襦袢かかげて我が家とす

蟻よバラを登りつめても陽が遠い

夏痩せの胸のほくろとまるねする

喜多青子

夢青し蝶肋間にひそみるき

陰多き螺旋階段春深し

秋炎の空が蒼くて塔ありぬ

砂日傘夜は夜でギターなど弾ける

下村槐太

片陰の窓に出てゐる腕かな

寒木の宙そらかすむ日の紙芝居

木の芽雨百日紅のみ孤絶せり

冬雲をわれは日暮にばかり見る

秋風に敵いくたりも吹かれるむ

平畑静塔

終電車手に青栗の君を歸し

藁塚に一つの強き棒插さる

狂いても母乳は白し蜂光る

高屋窓秋

秋風やまた雲とゐる人と鳥

海の眼や深い孤影の波間より

血を垂れて鳥の骨ゆくなかぞらに

きりぎりすきのふのそらのきのこ雲

渡辺白泉

馬場乾き少尉の首が跳ねまはる

戦争が廊下の奥に立つてゐた

銃後といふ不思議な町を丘で見た

白日に擧げし戦死の掌を見たり

繃帯を巻かれ巨大な兵となる

滑り臺巨きくなつてくる子供

野見山朱鳥

汽車の月虚空を飛べる枯野かな

飛び散つて蝌蚪の墨痕淋漓たり

悪寒來る頭腦のひだに蝌蚪たかり

曼珠沙華竹林に燃え移りをり

わが墓に來て立つは誰秋の風

大寒の海胆の一つの針動く

犬の舌枯野に垂れて眞赤なり

二階より枯野におろす柩かな

手鏡の中を妻來る春の雪

冬蜂の胸に手足を集め死す

黒髪の白變しつつ野火を見る

皿に盛る櫻桃の柄の總立ちに

つひに吾も枯野の遠き樹となるか

高柳重信

犬抱けば犬の眼にある夏の雲

きみ嫁けり遠き一つの詁に似たり

*

身をそらす虹の

絶巔

処刑臺

*

頭つぶれてなほ動く蛇を恐れし日

六つで死んでいまも押入れで泣く弟

友よ我は片腕すでに鬼となりぬ

齋藤慎爾

いちまいの蒲團の裏の枯野かな

菜の花を父を弑せし吾の來る

花莫蔭に見し夢にして繼ぎ難し

海暮れて一流木の父の聲

蜂の巢の千の暗室母の情事

風鈴の枯らしてしまふ廂かな

ががんぼの一枝が葉卒業す

蜂窩暗し父より惡の眼を亨くや

雛段に並ぶや前生のあねいもと

秋祭生き種子死に種子選りて父

断崖に島極まりて雪霏々と

水母群るる海より重き月上る

凍港の中央碧き潮動く

日蝕始まる街の中心牛啼きて

明らかに風の糸のみ暮れ残る

新緑の道ゆく少女眉青し

寺山修司

影墜ちて雲雀はあがる詩人の死

マスクしてひとの別離を見つゝあり

法醫學・櫻・暗黒・父・自瀆

舟蟲や亡びゆくもの縦横なし

西日さす墓標ななめに蟻のぼる

雲切れし青空白痴いつも笑あり

ジャズさむく捨てし吸殻地で濕る

ライオンの檻で西日の煙草消す

雪はげし一墓のために笹拓く

凍蝶とぶ祖國悲しき海のそと

故郷遠し線路の上の青カエル